

## &lt;前回&gt;オリエンテーション

## 1. 近代の思想状況と自然神学

1-4: ティリッヒ 4/30

1-5: モルトマン 5/7

## 2. 形而上学批判と形而上学再構築

2-1: ハイデッガー・解釈学 6/4, 11

2-2: ホワイトヘッド・プロセス神学 6/25, 7/2

## 3. 自然神学の新しい動向

3-1: クレイトン 7/9

3-2: マクグラス 7/16

3-3: 意味論・言語論 7/23

## Exkurs

人文学の新しい可能性——キリスト教の視点より 5/14, 21

科学技術の神学の可能性——現代キリスト教思想の文脈より 5/21, 28

## &lt;前回&gt;自然神学の起源と展開

1. Natural Theology (*The Oxford Dictionary of the Christian Church*, 3rd. edition, p.1132r.)

2. Natürliche Theologie (Walter Sparr), in: TRE 24. Walter de Gruyter. 1994, S.85-98.

3. 聖書的前提

・創造論／知恵思想：詩編 8.2-10

・パウロ：Rom 1:19-20

5. 古代ギリシャ哲学→キリスト教・教父

・Ingolf U. Dalferth, *Theologu and Philosophy*, Wipf and Srock Publishers, 2001.

&lt;プラトンの自然神学&gt; (『法律』第10巻、『プラトン全集 13』岩波書店)

&lt;ロゴス論&gt;

・ストア哲学、アレクサンドリアのフィロン

・アウグスティヌス『神の国』第4巻第27章

・David C. Lindberg, "The Medieval Churches Encounters the Classical Tradition: Saint Augustine, Roger Bacon, and the Handmaiden Metaphor," in: David C. Lindberg and Ronald L. Numbers, *When Science & Christianity Meet*, The University of Chicago Press, 2003.

6. 波多野精一『西洋宗教思想史（希臘の巻）』、「第八章 ヘラクレイトス Herskleitos」

・ロゴスを「神」と呼んだ(95)、「永遠の法則」「隠れたる調和」において最も深き本質を  
実現する「叡智」、「かくの如き神は自体において経験を超越するものでなければならぬ」  
(95)

・神を理想的精神的実在と認めた、超越性と内在性との両思想要素を結合させる努力  
汎神論の特色、一者即一切者の思想

↓

プラトン及びプロティノスの思念なる思想の萌芽、一者の超越性(99)

・ロゴス説の影響：プラトンのイデア論、ストア派・ヘラクレイトスの再生

↓

フィロンを経て、キリスト教神学へ

7. キリスト教古代・教父：Jaroslav Pelikan

キリスト教思想の形成の二つの動機・文脈

・キリスト教の弁証                      ・キリスト教内の論争：正統と異端

8. 中世の自然神学→近代へ

二つの書物と知の体系化

## 1. 近代の思想状況と自然神学

### 1-2：啓蒙主義的知と近代神学

(「1-3：現代神学と科学・技術」→ Exkurs 5/21, 28へ)

#### (1) 啓蒙的近代とその意義

1. 近代とは：社会システム変動が現実性全般に及ぶプロセス

キリスト教の普遍性あるいは合理性に対する根本的な問題提起

社会統合の原理がキリスト教から次第に分離し、キリスト教の地位が相対的に低下する。

キリスト教会→国民国家、神学→哲学→科学

2. カント「啓蒙とは何か」(『啓蒙とは何か』岩波文庫)

「啓蒙とは、人間が自分の未成年状態から抜けでることである、ところでこの状態は、人間がみずから招いたものであるから、彼自身にその責めがある。未成年とは、他人の指導がなければ、自分自身の悟性を使用し得ない状態である」、「他人の指導がなくても自分自身の悟性を取って使用しようとする決意と勇気を欠く」、「それだから「取って賢かれ！(Sapere aude)」、「自分自身の悟性を使用する勇気をもて！」——これがすなわち啓蒙の標語である」(7)、「人間の根本的な考え方の真の革命」、「自分の理性をあらゆる点で公的に使用する自由」(10)、「啓蒙を進歩せしめることこそ、人間性の根源的本分だからである」(14)、「宗教上の事柄に関して何ひとつ国民に指図することなく、むしろこれらの事については彼等に完全な自由を与えることを義務と見なし、そのような言明を彼自身の尊厳にふさわしからぬものと認めないような君主」、「自由の精神」(17)、「啓蒙の重点を主として宗教に関する事柄に置いた」(18)

3. 啓蒙主義とは？ (シャンタル・ムフ『政治的なるものの再興』千葉眞他訳、日本経済評論社)

・「啓蒙の抽象的普遍主義、社会的全体性に関する本質主義的構想、単一の主体の神話」「啓蒙の認識論的視座」「自己の基礎づけにかかわる啓蒙のプロジェクト」

・「万人の平等と自由とを成就していった近代の政治的プロジェクト」

Alister McGrath, *The Open Secret. A New Vision for Natural Theology*, Blackwell, 2008.

7. A Dead End? Enlightenment Approaches to Natural Theology. pp.140-170.

4. 啓蒙主義の思想的特徴：

ティリッヒ『キリスト教思想史II』(別巻三)白水社。：自律、理性、自然、調和 → 市民として人間、合理的宗教、コモンセンスの道徳、主観的感情。

「神は世界を造ったが、今や世界は自己自身の法則に従う。神はもはや干渉しない。干渉はすべて計算可能性の喪失を意味する。このような干渉は受け容れがたいものであり、それゆえあらゆる特殊啓示は否定される必要がある」(68)、「地獄の恐怖も排除された」(69)、「恵みと同様、有限性、絶望、不安といった実存的要素も除かれた」、「残るものは、道徳的要素、しかも、ブルジョワ的な正義と安定という角度から見られた道徳である。霊魂不滅の信仰も残る。それは、死後も進歩改善を続ける人間の能力を意味していた。」(70)



## 理神論

## (2) 理神論=啓蒙主義的宗教論

5. 17～18世紀、イギリスからフランス・ドイツへ。国家や教派を越えた広範な影響力
- ・エドワード・ハーバード(Herbert, Edward 1581-1648、チャーベリーのハーバード)
  - ・ジョン・ロック(Locke, John 1632-1704)：経験論哲学、広教主義、宗教的寛容や政教分離、『キリスト教の合理性』(*The Reasonableness of Christianity*, 1695)
  - ・ジョン・トーランド(Toland, John 1670-1722)： *Christianity not mysterious*, 1695.  
(『秘義なきキリスト教』法政大学出版局、2011年。)
  - ・カント『単なる理性の限界内の宗教』(1793), *Innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft*
  - ・Emanuel Hirsch, *Geschichte der neueren evangelischen Theologie im Zusammenhang mit den allgemeinen Bewegungen des europäischen Denkens*.
6. 理神論、キリスト教の合理化の試み → キリスト教の解体・宗教批判から無神論へ。
7. 宗教本質論として：信仰とは、信仰命題を真理として受け入れること。知的営み。  
ハーバード『真理について』(1624)：理性宗教(自然に備わった生得的なもの)  
最も本質的な最高存在が存在する、最高存在への崇拜、敬虔な崇拜は美德である、罪は悔い改めによって贖わなければならない、来世(因果応報的)の存在
8. スピノザ(1632-77)『神学・政治論——聖書の批判と言論の自由 上下』岩波文庫。  
「前章に於て我々は、人間に真の幸福を与え・真の生活を教える神の法はすべての人間に普遍的であることを示した。のみならず我々はそれを人間の本性から導き出したので、それに依れば、神の法は人間の精神に生得的であり、いわば人間の精神に書き込まれていると考えてよいのである」(上172)

手島勲矢『ユダヤの聖書解釈——スピノザと歴史批判の転回』岩波書店。



## 近代聖書学へ

9. F.L.Cross and E.A.Livingstone(eds.), *The Oxford Dictionary of the Christian Church*. Third Edition, Oxford University Press, 1997.
- Deism (from *Lat.* Deus, 'God'). The term, orig. interchangeable with Theism (q.v.), i.e. belief in one Supreme Being as opposed to atheism and polytheism, is now generally restricted to the system of natural religion which was first developed in England in the 17th and 18th cents. Among its precursors are P. Charron, J. Bodin (c.1530-96), and esp. Lord Hebert of Cherbury (q.v.), who in his *De Veritate* (1624) set out five truths common to all religions. J. Locke, though himself objecting to the title of 'Deist', also profoundly influenced subsequent developments through his *Reasonableness of Christianity* (1695). The classic exposition of Deism is John Toland's *Christianity not Mysterious* (1696), which argues against revelation and the supernatural altogether. S. Clarke, in his *Demonstration of the Being and Attributes of God* (1704-6), distinguished four classes of Deists. For the first, God is only the Creator, with no further interest in the world; the second group admit a Divine Providence, but only in the material, not in the moral and spiritual, order; the third believe in certain moral attributes of God, but not in a future life; and the fourth accept all the truths of natural religion, including belief in a life to come, but reject revelation. .... (465)

### (3) 教養市民層の宗教

#### 10. 啓蒙的近代の宗教状況。

ヒュームの自然宗教（人間の自然本性に基づく合理的宗教）論の描く世界

クレアンテス：理神論者、フィロ：懐疑論者、デメア：有神論者

#### 11. 啓蒙主義の多様性：イギリス、フランス、ドイツ。→比較思想研究

近代ドイツにおける宗教の分化：世俗化の一つの形

ルター派／カトリック

教養市民の宗教／農民の世界／都市労働者の世界

12. 「教養市民とは、十八世紀末ないし十九世紀はじめ以降のドイツで「教養」の理念を核として輪郭をととのえていった一つの身分を指し、具体的には、ギムナジウムと大学で新人文主義的教育をうけた、ごく少数のエリート層を意味する。」（野田宣雄『教養市民層からナチズムへ——比較宗教社会史のこころみ』名古屋大学出版会、21）

「各時期にもっとも活力に富んでいた筈の新しい宗教運動ないしは思想運動が、いずれもいちはやく国王とその周辺のひとつにぎりのエリート層の側に吸いとられ、民衆の側に既存エリートにたいする対抗文化を興隆させる拠りどころとはなりえなかった。いいかえれば、少数の支配層が次から次へと新しい宗教や思想を食欲に摂取してその階層文化をゆたかにしたのにたいし、非エリート大衆の側は不活発で守旧的ルター派のカルチャーのなかにまどろみつづけたのだった。」（212）

イギリスのメソヂストとドイツの敬虔主義の違い。

↓

社会の安定化のために教会的宗教にも価値を見出しているが、自らの宗教性は、教養化し個人化してゆく（フランス啓蒙との相違）。

### (4) 啓蒙思想から 19 世紀にいたる生命論の自然神学—レイとペイリーの場合—

13. 「ニュートンの体系は多くの者にとって、世界が自己支持的な機構であり、その日々の働きのためには、神的支配あるいは維持を必要としないことを示唆しているように見えた。18 世紀の末までに、多くの人々にとって、ニュートンの体系は信仰よりも無神論や不可知論に導くように思われた。これは、ラプラスの『天体力学論考』——宇宙論において事実上神（説明的仮説あるいは活動的な保持者として）の必要性を排除した——と、詩人ウイリアム・ブレイクの著作——ニュートンの世界観がしばしばサタンと同一視されている——との双方に反映していると見ることができる。」（McGrath,1998,68）

14. レイ『創造のみ業に顕れた神の知恵』（1691）

「同書はそれまでの自然神学書の集大成であった。レイ自身の豊富な自然史研究を背景にしたデザイン論は説得力に富んでおり、同書はその後の自然神学書の模範となった。しかし元にしたモアの著書に引きづられて内容構成が錯綜しており、改版による大幅な加筆がそれを増大している。そのため一八世紀にはデラムの『自然神学』の方が多く読まれ、レイの思想は同書を通じて広まっていった。リンネもデラムの『自然神学』のスウェーデン語訳を読んで自然史の宗教上の意義を確信したのである。デラムはレイと親しく、レイの遺稿を整理したのもデラムであった。」（松永、1996、43）

#### 15. レイの自然神学の意義と方法

「神性の信念はすべての宗教——宗教とは敬虔に神を礼拝すること、あるいは神に仕えそして礼拝するという心の傾向性に他ならない——の基盤である。なぜなら、神へと来る者は神が存在することを信じなければならないからである。この主要な論点を十分な

S. Ashina

説得性をもって確固たる仕方では解決し確立することは、きわめて重要な事柄である。さて、これは自然の光と創造のみ業とから引き出された論証によって論証されねばならない。……自然の光によって、人間は神性の存在を十分に確信するのである。実にこの根本的真理についての超自然的論証は存在しているが、しかし、それはすべての人間あるいは時代に共通ではなく、無神論的人間によって難癖を付けられ除外されがちなのである。」(Ray, pp.iv-v)

16. 理論的に武装した無神論者を合理的に(自然の光からの論証にとって)論駁し、キリスト教的宗教の基盤である神の存在を説得的に論証すること。もちろん、こうした自然神学における合理的論証は、聖書に与えられた神の啓示と矛盾するものではなく、聖書も自然神学も、こうした神の御業の讃美において同じ目的を有しているのである。「恒星がかくも夥しい数の太陽であるというこの仮説は神の偉大さと荘厳さによりかなっているように思われる。」(ibid., p.3)

17. 論駁すべき三つの仮説(Hypotheses)——「いかなる卓越した非物質的な行為者の干渉や助力なしに、物質について機械的論仮説によって宇宙の形成を説明しようと企てる」(ibid., p.11)——として、アリストテレスの学説、原子論(エピクロスあるいはデモクリトス)、デカルトの機械論の非合理性を順次論じてゆく。

18. デカルト説(ibid., pp.20-40)。モア、カドワース、そしてニュートンの反デカルト主義

「自然の中には、機械的力の作用を超えていたり、あるいはそれに反しているため、機械的力の作用によっては、目的因と何らかの生命原理なしには解き得ない多くの現象が存在する。例としては、重力や物体への落下の傾向性が挙げられる。」(ibid., p.26)

19. 「わたしは、動物を単なる機械というよりはむしろ、低い程度の理性が与えられていると考えるべきである」(ibid., p.38)。

20. 議論の概略、まず天体から地球へ(天から地へ)と進められ、次に生命の世界へ。

1. 天体(pp.45-51)
2. 地上の生命のない単純な物体(pp.52-63)：火、空気、水、地
3. 大気現象(pp.63-66)：雨、風
4. 生命のない複合的物質(pp.67-73)：石、金属
5. 野菜あるいは植物(pp.74-86)
6. 感覚的魂を与えられた物体、すなわち動物(pp.86-134)：鳥、魚、…
7. 被造物からとくに選ばれた二つの考察対象：

全体としての地球(pp.134-150)、人間の身体

8. 人間の身体(pp.151-223)：他の生物の場合と比較しつつ。

直立姿勢(pp.151-169)、目(pp.169-185)、耳(pp.185-187)、  
歯・舌・気管・心臓・手・骨・筋肉(pp.187-223)

9. 道徳・宗教(身体の解明に基づく実践的な推論＝人間論)(pp.223-249)

21. レイの議論のポイント

①レイの自然神学は、最初に確認した無神論的な仮説の取り扱いからもわかるように、ニュートン主義の自然神学に属するものと言える。また、天体や生命のない被造物にも一定の頁が割かれており、宇宙の全体から人間へという議論の枠組みが確認できる。

②しかし、レイでは、記述の大きな部分を使って、生命体、とくに人間が扱われており、レイの関心が天体や無生物ではなく、むしろ、自然史研究が問題にする生きた生命体や人体であることは疑いもない。無神論的な仮説を論駁する場合も、基本的には先行する諸研究(カドワース、ボイルなど)を参照する程度にとどめた議論であり、レイの関心がニュートン的な自然哲学とは異なるところにあったことを示唆しているように思われる。我

々はレイにおいて、その後のペイリーに至る自然神学の発展の方向性、つまり神のデザインを論じる主要な場の移行の発端を確認することができるのである。

③研究者も指摘するように、レイの議論においては、人間の身体について、とくに目と視覚との分析が詳細になされている点に特徴がある。もちろん、人間の目の仕掛け (contrivance) の完全さや巧みさを論じるということの目的も、「我々の身体の完全さと完璧さに対して全能の神に感謝」 (ibid., p.223) することにあつたことは言うまでもないであろう。

④レイの自然神学は後の自然史研究に大きな寄与を与えたものであるが、しかし、それは倫理学や宗教論、あるいはそれらに基づく人間論への展開を含むものであつた。レイは、「人間の身体に関する言述から、三つの実践的推論を行おう」 (ibid.,) と述べているが、これは人間の身体の科学的分析から道徳と宗教へ踏む込むものであり、自然神学がまさに「神学」としての性格あるいは問題意識を有するものであることをよく示していると思われる。

22. ペイリーの『自然神学』: ニュートン主義の自然神学の発展の到達点あるいは集大成  
「一九世紀に入ると、デラムに代わって一八〇二年に刊行されたペイリーの『自然神学』が自然神学の標準的な教科書となった。……一九世紀前半、イギリスの科学者の大半はペイリーの信奉者であつた。ダーウィンの進化論もペイリーの自然神学を土台として生まれてきたのである。ペイリーは独創的な研究者ではなく、教科書の執筆者として優れた能力を持っていた。ペイリーの主要な著書には『自然神学』のほかに、一七八五年刊行の『道徳・政治哲学の原理』と一七九四年刊行の『キリスト教証権論』があるが、いずれも教科書として高い評価を得ていた。」 (松永、1996、47-48)

### 23. デザインを論じる場の移行

「天文学についてのわたしの意見は常に次のようなものである。すなわち、わたしは、天文学は知性的な創造者の作用を証明するのに最適の手段ではなく、またこれが証明された場合には、天文学は、他のあらゆる諸科学以上に神の働きの壮大さを示すと考える。一度説得された精神を、天文学は他のどんな学科が与えるものよりも、もっと卓越した神性の見方へと引き上げるのである。しかし、天文学は他のいくつかの学科と同様に、論証という目的にはあまり適していない。我々は、天体の構成を吟味するための手段を欠いているのである。天体のきわめて単純な見かけが、吟味の手段にとって不利になっているのである。我々が見るのは、明るい点、輝く領域、そしてそれらを照らす光を反射する天空の相にすぎない。さて、我々は諸部分の関係、傾向、対応からデザインを推論する。それゆえ、この種類の論証にふさわしいテーマを提示するには、一定程度の複雑さが必要になる。しかし、天体は、おそらく土星の輪の場合を例外として、諸部分から複合されたものとしては我々の観察に現れないのである。」 (ibid., pp.263-264)

24. 17世紀のニュートン主義と19世紀初頭のペイリーとの歴史的状況の相違、とくに天文学や物理学をめぐる知的状況の変化。啓蒙主義。村上陽一郎の「聖俗革命」。

「この革命には、大雑把に言って二つの段階がある。その第一は、知識を共有する人間の側の世俗化がそれであつた。神の恩寵に照らされた人間だけが知識を担い得る、という原理から、すべての人間が等しく知識を担い得る、という原理への転換である。F・ベーコンに、その最も典型的な発想を見ることができる。第二の段階は、知識の位置づけのための文脈の転換であつた。神—自然—人間という文脈から自然—人間という文脈への変化がそれである。その変化のなかで、科学と哲学とが、それぞれに独立するというプロセスが付随する。」 (村上、1976、25)

25. 「この聖俗革命の二段階が、ある時期を区切って、明確な形で起こっている」 (ibid.)

S. Ashina

わけではない。しかし、まさに「大雑把に言って」、「一六・一七世紀に起った知の世界における革命を、理論上の革命とするならば、一八・一九世紀に起ったそれは、各科学理論を支える形而上学的な枠組みの革命であった」（*ibid.*, 26 頁）。

26. 諸科学における聖俗革命の進み方の多様性：天文学・物理学→生物学→心理学

### （5）進化論とキリスト教

書評：フランシスコ・J・アヤラ 『キリスト教は進化論と共存できるか？ ダーウィンと知的設計』（藤井清久訳）、教文館、2008年。

本書の著者アヤラは進化遺伝学の分野で著名な生物学者（現在、カリフォルニア大学アーヴァイン校教授）であり、本書は、反進化論思想として最近話題の「知的設計（ID）」論を論駁しつつ、「科学と宗教的信仰とが対立する必要はない」ことを示すことを目的としている。進化論とキリスト教創造論の間に深刻な対立（アメリカにおける公教育での進化論の扱いめぐる裁判など）が存在することは日本でも良く知られているが、「科学と宗教」の対立論は、現代思想の主流でも、キリスト教思想の代表でもない。対立論の対極に位置するのが科学と宗教の分離論であり、アヤラはこの立場に立っている。

本書では、まずキリスト教自然神学と進化論を代表する、ウィリアム・ペイリとチャールズ・ダーウィンの思想が検討される。多様な生物の複雑かつ精巧な器官とそれによる自然環境への見事な適応とをいかに説明できるかという近代生物学の基本問題について、ダーウィン以前において最も有力だったのは、キリスト教自然神学の学説であった。ペイリは、この問題は全知にして全能な神（知的設計者）の「設計」を前提とするときにのみ解決可能になると論じたが、そこには、生物に見られる様々な不完全性や機能障害の説明に関する難点が存在した。ダーウィンの進化論は、このペイリが取り組んだ問題に科学的解答を与える試みであったと解することができる。実際、著者が論じるように、「進化」はダーウィンの発明ではなく、キリスト教思想の中にも類似の議論が確認可能である。むしろダーウィンの真の新しさは、「自然選択」論に求められねばならない。生物の見事で多様な設計とその不完全性とが、知的設計者としての神なしに、「生物の環境への適応を促す、自然的選択プロセスの結果」として説明されたこと、これが画期的だったのである。

続いて著者は、進化論が科学的事実であること——分子生物学による「生命の全体系統樹」の再構成などを証拠として——へと議論を進め、これに基づいて、ID論の徹底的な論駁を試みる。要点は、次のようになる。ID提唱者は、進化論では説明できないとされる生物学的現象（目などの「単純化できない複雑なシステム」）を挙げることによって、ID論の正しさを論証しようとするが、これは、「進化論がくつがえされれば、その分だけIDが確証される」という誤った二分法に基づいている。ID論は、検証可能な科学的仮説ではなく、神に自然の不完全性や欠陥の責任を帰する点で、良き神学でもない。進化論については、神の世界創造と現実の悪（欠陥や不完全性）とがいかに両立できるのかという古代からのキリスト教神学の難問に一つの解答を与えたとの評価も不可能ではない。

著者の立場は分離論であり、科学と宗教にその専門領域を超えないことを要求する。この要求は、ID論だけでなく無神論的原理主義者（リチャード・ドーキンスら）にも向けられねばならない。著者によれば、科学は「方法論的に自然主義的」であるが、「形而上学的唯物論」（＝反宗教）ではない、科学と宗教とは「知識の重複しない領域」であり、本来対立することはあり得ない。形而上学的無神論とID論という二つの原理主義の欠陥を的確に認識することが科学と宗教の関係理解の前提であることを考えるならば、本書は、こうした問題に取り組む者にとって、適切な出発点、良き入門書と言わねばならない。

<参考文献>

0. ニュートン主義の自然神学から。デザイン神学。
  - ・ William Paley, *Natural Theology* (1802), in: *The Works of William Paley*, Thoemmes Press, 1998.
  - ・ John Ray, *The Wisdom of God manifested in the Works of the Creation* (1691), Georg Olms Verlag, 1974.
1. 芦名定道『ティリッヒと弁証神学の挑戦』創文社、『自然神学再考——近代世界とキリスト教』晃洋書房。
2. A.E. マクグラス『科学と宗教』教文館。  
『「自然」を神学する——キリスト教自然神学の新展開』教文館。
3. 大木英夫『新しい共同体の倫理学——基礎編・上下』、『組織神学序説——プロレゴメナとしての聖書論』教文館。
4. 近藤勝彦『デモクラシーの神学思想』教文館。
5. 加藤節『ジョン・ロックの思想世界——神と人間との間』東京大学出版会。
6. デイヴィッド・ヒューム『自然宗教に関する対話』法政大学出版会。
7. 松永俊男『ダーウィンの時代——科学と宗教』名古屋大学出版会。
8. 佐々木力『近代学問理念の誕生』岩波書店。
9. 長尾伸一『ニュートン主義とスコットランド啓蒙』名古屋大学出版会。
10. 村上陽一郎『近代科学と聖俗革命』新曜社。
11. Richard Bentley, *A Confutation of Atheism from the Origin and Frame of the World.*, 1693.  
in: I. Bernard Cohen (ed.), *Isaac Newton's Papers & Letters on Natural Philosophy and related documents*, Harverd Univ. Press, 1958.
12. Margaret C. Jacob, *The Newtonians and the English Revolution 1689-1720*, Gordon and Breach, 1976.
13. David C. Lindberg and Ronald L. Numbers (eds.), *God & Nature. Historical Essays on the Encounter between Christianity and Science*, University of California Press, 1986.
14. David N. Livingstone, *Re-placing Darwinism and Christianity*, in: David C. Lindberg and Ronald L. Numbers (eds.), *When Science & Christinity Meet*, The University of Chicago Press, 2003.
15. Alister E. McGrath, *The Foundations of Dialogue in Science & Religion*, Blackwell, 1998.